娘・母関係の物語（二）

山田英美

第一部（続）

第六話　篠山幼稚園時代【恥】
第七話　明石播陽幼稚園時代【緘黙】
第八話　小学校【登校拒否】
第九話　思春期へ【反抗期】
第十話　青年期へ【成熟拒否】
第十一話　母の死【歩み寄り】
第一部のむすび

第六話　篠山（ささやま）幼稚園時代【恥】

当時はまだ幼稚園に行く子どもが少ない時代だったが、教育熱心な両親の方針で、私は兵庫県篠山町の町立幼稚園年中クラスに通うことになった。兄は隣り合わせにあった同じ公立の小学校に入学していた。母に連れられて幼稚園の門をくぐった日は、私にとって初めて社会というものに出会った記念すべき日であった。

緊張と矜持のないまざった心持ちの四歳の私がいる。保護者説明会が終わってもうだれもいない教室の外で、母と担任の若い先生が立ち話をしているのを辛抱強く待っていた。やっと母が帰るそぶりを見せたので、私は先生にきちんと挨拶をするぞという意気込みで、頭を深々と下げ、しっかりと声を出して

「せんせい、さようなら。」と言った。

「まあ、この子ったら。」と肩を触りながら笑う母の声に驚いて頭を上げると、先生は、私の後ろにいた！先生にお尻を向けて体を折りまげていたのだ。にこやかに笑っておられた先生だったが、私はここ一番というときに失敗したと、深く恥じた。幼児の不器用さはまったく恥じるにおよばないのだが、私はなかなかこのことを自分に許すことができなかった。そのために幼稚園では自分を表現するのに臆病になり、内気な子どもとならざるをえなかった。

ある日、母が留守なので、幼稚園から帰ったらお隣のおばさんのうちに行くようにと言われていた。園かばんを置いてからおばさんのうちをたずねると、

「ちょうどよかった、いま○○を作っていたところ。おやつに食べなさい。」と、あたたかく迎え入れて、手作りの蒸し菓子をお皿に入れて出してくれた。

おやつの後に、おばさんは

「幼稚園では、どんなお歌を歌っているの？お遊戯はどんな？」と聞いてきた。実にいやな、私が一番苦手な要求だった。でも、親切なおばさんの頼みだからいやだというわけにもいかないし、と覚悟を決めて、私は自分で歌を歌いながらおどった。

おばさんは体を斜めにして畳に片手をつき、まじめな表情でじっと凝視していた。ちら、とおばさんの笑ってない顔を見たとき、

「おばちゃんは、わたしが『へた』と思っているらしい」とげんなりしたが、最後までとにかく続けた。踊り終えたとき、おばさんは手をたたき、

「じょうず、ほんまにじょうず。」とほめてくれた。とても意外だった。傷つきやすい幼児の心だが、家族以外の人とのふれあいの中でほめられることで、自信をつけることも容易である。

篠山の冬は寒かった。幼稚園の行き帰り、胸の高いところに両のこぶしを合わせて腕をぴったり体につけ、ぼそぼそ歩いた。それが一番寒さに抗うことができる格好だった。ある日の帰り、家の門が見える角を曲がると、玄関口に母と誰かがいて、私を認めると

「ほら、チンが帰ってきた。チンが。」と、母が笑いながら言っているのが聞こえた。『チン』って？狆という犬は私も知っている。それが近くにいるわけではないことがすぐに分かると、いつも狆のポーズをしていると揶揄されていることに気づかされて、はずかしかった。自己像を初めて意識させられたできごとだった。それ以来、狆のポーズは努力してやめ、寒さはいっそう身にこたえることになった。

第七話　明石、播陽（ばんよう）幼稚園時代【緘黙】

母にとっても父にとっても、篠山時代は人生で一番楽しくまた輝いていたと母が後年述懐するのを聞いたことがある。一家は、私が篠山幼稚園年中組に通った次の年の春には、父の転勤で県内の明石

市へ引っ越した。おとなの事情は分かるはずもないが、後から考えるとわざわざ戦渦に巻き込まれるような引越しである。しかし、なれた環境から離れる寂しさより新しい生活への好奇心と期待のほうが勝っていた私は、小さな妹とはしゃいでいた。

母にとっては引越し先での私の幼稚園選びが一つの緊急課題だったらしく、早速、明石では名門で知られていた私立幼稚園にアタックを始めたのだった。

播陽幼稚園の門をくぐって、園長先生に面会したときには私もそばについていた。先生が

「残念ですが、もう試験がとっくに終わって、定員いっぱい入る人が決まってしまいました。」と言われたときには、母はほんとうにがっかりした様子だった。普通はそれで諦めるのだが、なぜか母は引き下がらず、再び、三たび、園長先生を訪ねるのである。何回通ったか定かではないが、いつも私を連れて行った。和服姿の凛とした雰囲気の園長先生が、ついに、おっしゃった。

「お母さまの、熱意に、負けました。」

そして、私は母が望んだ「良い」幼稚園の年長組に入ることになったのである。母は、道路を振り返って、この角を左へ曲がって二つ目の広い道路のところで蔦に覆われた建物にそって・・・と、引っ越したばかりの自宅からかなりの道のりを一人で歩く我が娘のために道順を教えるときには、意気揚々とした感じだった。言われるがまま生きるより仕様がないのは幼い者の宿命である。

まもなく、私は自分が幼稚園で深海の貝になっているのが分かった。園に行くのはいやではないが、門をくぐったとたんに口が開かなくなってしまうのである。年長児の年齢で自己分析をどれくらいできるか疑問ではあるが、私はその原因がうすうす分かっていた。

「わたしは、ほんとうはこの幼稚園には入れないのに、むりに入れてもらった。園長先生が『お母さまの熱意に負けました』とおっしゃったではないか。遠慮していなくちゃいけない…。」そして、超自我の支配する無意識的な力が、私の口を閉じさせてしまったのである。喋らなくてもイエス・ノーの意思表示は首のサインでできるし、絵を描いたり工作やお遊戯、できることはいっぱいあり、園生活はそれなりに楽しかった。それでも緘黙を貫くことがいかに悲しいことか、という思いは時々私を圧倒した。

その幼稚園では給食があったが、主食のお米だけ各自が小さな布袋に入れて持参し、給食のおばさんが集めて焚いてくれるのである。毎日どんなおかずが出たかを母が聞き、私は全品の味や色や材料などを記憶しておいしい給食を母に伝えることがたのしみだった。ある日、母は小袋がぱんぱんに膨らむほど白米を入れて持たせた。母の思い入れが推し量られるようなことである。子どもたちの袋が集まったときに、給食のおばさんが、

「これ誰の?」と私の袋を高く上げて聞いた。

「いっぱいお米が入れてあるから、ご飯を大盛りにしてあげなくちゃ。」それを聞いて、向こう側に座っていた活発な男の子が「ぼ

くの！」と手を挙げ、隣の女の子たちも「わたしの！」などと口々に言う。

「それは、わたしの！」思わず言いかけて、のどのところで言葉が固まってしまった…。私は、母に悪いという気がしたし、たくさん盛ってもらえるせっかくの権利を放棄せざるを得ないということが悲しく、しょんぼりうつむく以外になかった。

給食の時間。目の前の長机にご馳走の皿や炊きたてご飯を盛りつけた子ども茶碗が次々と並べられた。忙しく立ち働きながら、給食のおばさんが私の耳元でささやいた。

「あの袋はあなたのだったんでしょ。ごはん、たくさん入れてあげたからね。」見ると、ほかの子の茶碗にくらべて本当に小山のようにご飯が白くおいしそうに盛られている。おばさんを振り仰いだ幼児の顔は、おそらく喜びと感謝で輝いていたことだろう―そういうおばさんがいる幼稚園というのは、やはり良質の園だった…と、なつかしく思い出す。

私が幼稚園で一言も話さないということが、園長先生からの連絡で母の知るところとなり、母は私を伴って放課後に園を訪ねた。私はてっきりしかられると思って緊張していた。誰もいない教室で担任の若い先生が私たち母子を待っておられた。そして開口一番「○ちゃんは、確かに何もしゃべりません。でも、なんでもちゃんとできる子です。見てやってください。」とおっしゃって、隣の工作室から私が粘土でこしらえた急須と湯のみ茶碗を粘土板にのせて母に見せるために運んでこられた。作品の急須には蓋もついていて、粘土はひしゃげずしゃんと形を保っていた。母はその蓋を取ってみたりしながら、なんとなく微笑んでいた。先生は、ほかに画帳を見せたりしてから

「心配いりません。」ときっぱり言われた。園を辞しての帰り道、母は鼻歌も出そうなくらいにるんるん気分で私とつないだ手を振って歩き、

「幼稚園で喋らないけど、何でもちゃんとしているんやね。心配いらんて。」と、先生の言われたことを確認するように繰り返していた。なぜ喋れないかということを大人に説明できるほど自我が発達しているわけではない幼児にとっては、喋らないことをとがめられたり、だめな子という評価を少しでも感じさせられると、自分を責め、どうしてよいか分からなくなってしまう。むしろ子どもの健康な面を捉え「あなたはこの幼稚園にいていいのよ。そのままでいいのよ。」と言っておられるような先生の言動に、心底ほっとしてうれしかった。忙しい母は、それきり私の場面緘黙を問題にしなかったし、私は最後までその園では声を出さないで、それなりに元気にすごしたのだった。

戦色が濃くなるにつれ、まわりにけが人や病人も増え始めた。路地に面した家の二階から、子どものヒュー・コンコンコンとふいごのような咳が何日か絶え間なく聞こえていたが、それがぱったりやんだと思ったら、かわいそうにあの子は百日咳で死んだ、というう

わさだった。近寄ってはいけないと言われ、子どもだけでそこを通るときは駆け抜けるようにした。

そんな時、私の咽喉がはれ、ジフテリアと診断されて、人里はなれた伝染病隔離病棟へ入院することになる。でこぼこ道を母の背中に負ぶわれて歩いた心地よい感触を私は宝物のようにときどき反芻して大事にしていた。病室では母と二人きりで、昼間はベッドの上でたくさん折り紙を教えてもらった。母が「賢い子やなぁ。何でもいっぺんで覚えてしまう。」とつぶやいたのも、新鮮な体験だった。きのう真夜中に山の奥で狐が「クワーッ、クワーッ」とないていたと母が口まねしたときには、怖くもあったが狐はほんとうはコンコンとなくのではないということにも驚いた。何日かたったときに突然妹が誰かに負ぶわれてやってきた。のどが痛いという妹を診た近所の医者が、同じ病気だと診断したという。

「エーッ、その子も！」と母は叫んだが、病院の医師が来てどうも違うということになってごたごたしたのをきっかけに、ジフテリアは完治したのか誤診だったのかもあいまいなまま私と母の蜜月も終わりになって、家に帰った。

幼稚園の卒園式はあったかどうか。戦況は逼迫していて私は独り縁故疎開に出された。そのときのことは第一部第五話に書いた。

第八話　小学校【登校拒否】

疎開先で終戦を迎えて、やっと母たちとも同居ができるようになったが、その年の春に生まれていた乳飲み児（次男）をかかえた一家は他家に間借りなどを重ねつつ転々とする生活だった。両親も生活の混乱で苛立ちやすかったと思うが、私は母に対して突きつけたい請求書を渡しもできず、その後出身校になる小学校に転校した当座、暗い気持ちに閉ざされて『学校へ行きたくない』病にかかり始めていた。嫌がる私を、母に頼まれた近所の高学年のお姉さんが迎えに来て学校へ連れて行ってくれようとするのだが、抱えるようにひっぱって行かれるのも屈辱的でいやだった。お姉さんの腕をすり抜けて家に帰ってしまった日、怒った父が私を横抱きにして、「やいと（お灸）をすえるぞ！」と本気にもぐさの用意を始めたので、「こんな家にいるよりは、学校のほうがまし！」と、すごすごと学校へ向かったことを覚えている。

顔色のさえないそんな私を学校に根付かせてくれたのは、まだ二十歳をいくらも出ない若い女の先生だった。先生は放課後になるとクラスの生徒を四、五人ずつ近くの神社の境内へゆったりと散歩に連れ出して板張りの縁側に腰掛けさせ、一人一人に分かりやすい言葉で語りかけてくれた。当時はそれほど普及していなかったと思われる写真をグループで特別に撮ってくれたりもした。先生がしてくれた話で私の心にポッと小さな灯りをともしたのは、それぞれの子どもの名前について、親がどんな思いを込めて名づけてくれたか、字が象徴する子どもへの親の願いや愛を教えてくれたことだっ

た。自分と親の関係について、目からうろこの初体験ではなかったかと思う。

ずっと後になってから、私の名前は、実は、姉の名入り傘をあつらえたときに、うっかり傘屋のおじさんが間違えて書いてきた名前を、『これもええな』と、まもなく生まれる子どもにいただくことにしたというのが真相らしかった。そんなことを面白おかしく軽く語られるのにも動じない年頃になってから母から聞いたのは幸いだったというべきだろう。とにかく、母からも父からも愛されない存在としてこの世に生まれたのではなかったという、ファンタジィと自己イメージをいだかせてくれた先生の影響は大きかった。母をしっかり奪還できたわけではなくやや不燃焼ながら、不登校はその辺で吸収され、私は学校の路線から大きく外れることなくエンジンがかかり始めたのだった。

第九話　思春期へ【反抗期】

八歳年上の姉は学徒動員で明石時代から私たちとのかかわりがふっと途絶えていた。姉の存在が家の中に日常的になったときには、言葉も田舎者とは違い異文化を感じさせて、一目も二目も置かざるを得ないぎこちないものを禁じえなかった。

ようやく、父が、住居を併設した県立の実験農場の創設と運営を任されて、一家が村での定着の生活にはいったのは私が小学三年生のころである。私たち兄弟姉妹は村人から「農場の子」と呼ばれて、社会的にはいささかよそ者の扱いを受けた。母も同じ地区の子たちを「上の子」と呼び、子どもらが上の子らと交わって遊ぶことを好まずむしろ禁じたので、いつまでもよそ者でしかありえず、私は、都会からの村落疎開で暫定的に村に住んでいたちがった魅力を感じさせる子らに、心理的に接近した。私にとってのフロイドのいういわゆる潜伏期は、確かに学校生活が中心の外向きのエネルギッシュな時期となり、勉強は好きで、どの学年でも成績に苦労したことはなかった。

高学年に近づくと、私は自分に対してもきびしかったが、大人の理不尽さが許せない融通のきかない面を自覚するようになっていた。両親に対して胸の中が破裂しそうに悔しい思いを抱くことも多くなった。同胞みんな、そうだったのかもしれないが、子どもは大勢いるのに、自分に対するチェックが特に厳しいと感じていた。学校から帰ってきて本を読んだり予習復習をしたりしていると、父が「学校でする以外に家でも勉強しないとついていけないほど頭を悪く産んだ覚えはない！」と怒鳴り、大人と同じような仕事を手伝わせた。女の子だからというようなジェンダーは我が家の文化にはなかった。大きなサイロの中に入って穀物の箕を受けとる役は子どもだったし、田植えや草取りや、稲刈り、餅つき、わら草履だって編んだ。そういう手伝いは決してきらいではなかったし、かえって移り変わる稲田の香りや色に親しんだことは、原風景として豊かに

私の心を充たしたのだった。

私を苦しめたのは、そういう労働や手伝いそのものではない。夢中になって本などを読んでいると、遠くで名前を呼ばれたのも耳に届かないことがあることを信じてもらえず、「聞こえなかった」という言い訳は父にとっては口答えであって、「素直でない」という烙印をおされることだった。子どもの人格を否定するような評価をされることだった。

食卓はお説教の場であり、おしゃべりを楽しむ食事など存在しなかった。父の猛々しさに辟易すると、何事も母を介して意思疎通を図ることになるが、母もそのころには似たもの夫婦と化していて、我が家は完璧に男性原理が支配するようになっていた。学校は私にとって自分らしさを維持できるサンクチュアリだったのだが、反抗的な態度の娘をもてあました母は

「先生に言いつけてくる！」と目と鼻の先にある小学校へのあぜ道を走り、私のサンクチュアリに踏み入って、家庭での親に対する娘の言動を先生に告げ口して溜飲を下げるということもした。

担任の先生は、学校では優秀で何の問題もない生徒をどう指導すべきか困られたらしく、次の日、職員室に私を呼び出しておきながらどういう用事かも話さず、ただごそごそと机の書類などをかき回しておられたが、そのうち知らん顔をして職員室を出て行ってなかなかもどってこられなかった。私は手持ち無沙汰にじっと待っていたが、やっと現れた先生は、忘れてでもいたように「あ、まだいたの、もういいよ。」と、釈放してくれたところをみると、要するに昔よくあった『職員室に立たせる罰』を理由も告げずに与えたものらしかった。いまどきの子どもであれば、先生のやり方に対して文句の一つも言うかもしれないが、前日の母の来校や小言については一言も触れないことによって、生徒の学校での人格の尊厳をそこなわないでくれた先生に、私はむしろ感謝したい気持ちだった。母がなんと言ったかは知らないが、とにかく母の顔も立てたのだし。

第十話　青年期へ【成熟拒否】

中学時代は、よく言われるように、『幼児期をやり直す』時でもある。大人としてのアイデンティティを獲得する準備としてさまざまな心身の試練を潜り抜けねばならない。思春期から青年期にかけて、私は身をもって自分の幼児期の未消化な問題をどろどろとかき回して、このままでは大人になれない。なりたくない。と、もがき苦しんだ。無意識的な成熟拒否は、食べることへのこだわりを生み、拒食症とか摂食障害を発症することが多いが、私の場合は、都合よくと言おうか、部活動の運動時に水をがぶ飲みして飛び跳ねたりしたのが原因で胃下垂症になり、実際に食べられなくなった。身体はみごとに痩せていき、母親は心痛のため息をつきながら、あちこちの病院を連れて巡ることになる。

胃が下がって動きが不活発だという症状への対症療法では私の健

康は戻らないことを自分で分かっていた。心療内科で処方されたあやしげな水薬は一滴も飲まず、唾棄するごとく庭の南天の根元に捨てた。速やかに治っていくためには良いカウンセラーが必要だったと後年わかったが、そのころは臨床心理学はまだ未開発の分野で、そんな役割をとる人は知られていなかった。大家族であっても地域から孤立した家族の人間関係は閉塞的でかつ淡白なものであり、無条件にかわいがってくれるおじいさんおばあさん的な人にも恵まれていなかった。とにかく生きなおしの道をもとめて暗闇を手探りに歩くことを続けるため、私の本能は、再び弱い子どもとなって自分だけに向いてくれる優しい母をひとりじめするようにそそのかしたのである。

根は善良で単純という長所を持つ母は、知らずに私の本能の悪だくみの仕掛けにはまって相当心配していることは、横たわる青白い娘を見るときに思わずつく長いため息と表情で伝わった。そんな状況のなかである程度の安らぎを得ていた一方で、私は、自分の生きなおしのために母を苦しめることに強い罪悪感を覚えて『心配をかける悪い子』という自己評価を日記の中に繰り返し書いていた（文献1）。

その状態は中学三年から県立高校進学後も続き、体力が限界まできていたこともあって、両親は、消化器内科で評判の高かった姫路・仁豊野の聖マリア病院に五月半ばに入院させた。この入院は、それまでのもろもろのしがらみから切り離された転地療養となったばかりでなく、後の私の人生に新しい光の種を植えつけるという影響をあたえた。―バラの季節だった。よい香りのする色鮮やかな花々と緑。あちこちに白いベンチが配置され、両腕を広げた聖母像がたたずむ異国情緒が漂う楽園図のような庭や、医師をはじめ外国人修道者などの親切なスタッフたちは、疲れた小さな心身をすがすがしくやさしく包んでくれた。

『重荷を負える者よ、私のもとに来なさい』とキリストの言葉として新約聖書にあるが、常識的に考えると、一応社会的にちゃんとした両親がいて、衣食も足りていて、五体そろった私の重荷などどうということのない、ただのわがままに過ぎないとみなされても無理からぬところである。しかしキエルケゴールが『死に至る病とは〝絶望〟である』と言っているように、青年のこころは薄氷で生死を分けているように独特の重荷で容易につぶされやすいものである。

私はその楽園に五十日ほどいて、退院した。元気に現実の学校生活に復帰するためにはもう少し自宅療養の必要があるという判断のもと、そのまま年度末まで高校を休学することになった。大きな木製のテーブルをベッドにしつらえてくれていたが、夏の夜にはそのベッドを庭に出して満天の星空を眺めながら眠ることを工夫してくれたり、家族の接し方も変化していた。うまくは表現できなかったが、その星空を眺めていると宇宙の星々の間に吸い込まれそうな自分のはかなさを感じると同時に、無限のかなたから見守ってくれる

存在（神という存在）に、大地に足をつけてしっかり生きよ、と励まされているような感じにつつまれて胸がいっぱいになり、やさしさがこころの中から沸いてくるのを覚えたものである。父も

「あの子はこのごろ穏やかになった。」と、母に言ったという。

そのころの日記には「この一年の休学は私をいささかも汚さず、純粋なまま眠ってすごさせてくれる」というようなことを書いている。「いないいない・ばあ」の「いないいない」から「ばあ」に至る「こもり」の過程でどんな体験があって質的な変容があるのか、後年私は「「いないいない・ばあ」と人生」という論文を書きながら、はるか越し方の自身の体験をいたわりつつ思い起こしていた（文献2）。

第十一話　母の死【歩み寄り】

母は晩年もひどい認知症などにもならずに、自宅で満九十四歳の長寿を全うした。最愛の長女を失ってからも二十数年生きたことになる。若いころから編みものが得意で、七十歳代、八十歳代を通してたくさんいる孫子のだれかれに、注文に応じてセーターなどを精力的に手編みし、ほめ上手になっていた私にはセーターやジャケット三、四着のほかに深い錆紺色の毛糸でロングコートの大作を短期日で仕上げて送ってくれたりした。それは驚くに足るすばらしい出来だった。ほかにも大正琴を習い、毎朝、新聞を丹念に読み、俳句の会でつくった句を書いたはがきを送ってくれたりした。

卒寿の年に

【九十の齢賜（よわい）り　毛糸編む】

【一弁を　ひらく力の　寒の薔薇】などの句がある。

私が大正琴を習おうと思い立ったのは、兵庫県の郷里を訪ねた折りなどに母のそれと合奏できるようになれば、いっそう楽しむのじゃないかと思ったことが動機だった。母から弾き方を教えてもらうこともあった。かなりこなせるようになってきたころ、母が軽い脳梗塞で倒れたという知らせが入り、まもなく、ほとんど後遺症は残らず回復したものの、以前とずいぶん違う面が見られた。それは、意欲の減退である。編み物だけはしようとするのだが、もう複雑なものを編む気力も目と手の共応力も弱くなって、編みかけのものを見るとあちこちに落とし目があって、見る者を哀しくさせた。大正琴にも手を触れようとしなかった。簡単な曲をいっしょに弾こうよ、と促しても

「ええわ。あんたが弾いて。きいてるから。」そして、童謡などを私の琴に合わせてかすかな声で歌ったりして、気分はよい様子だった。

それから何か月か後のある夕方、私はひとり自宅にいた。しばらく部屋の隅に置き放しになっていた大正琴だったが、なんだか無性に弾きたい気持ちにかられて、ケースの埃を払った。調音してから、

教本のあちこちを開いて次から次へと途切れることなく無心に弾いていた。―電話が鳴った。それは、

「たったいま。」と、母の死を知らせる弟からのものだった。

私は図らずも母の葬送の爪弾きをしたのではなかったか。もし母の魂がそれを望んだのだったら、母は私を愛し完全に許してくれていたのだと感じた。私のほうからも母と歩み寄ることができた年月の流れがあった。それは、姉が重病のとき、

「わたしは子どものときは幸せじゃなかった！」と、母に詰め寄って（第一部第三話）以後のことである。あんな時にむごいことを言ったと思いもしたが、自分の気持ちをあいまいにしないでよかったと、考え直した。

母は根に持つ人ではなかった。少しのやさしさを示されることで、もろもろの確執も相手から受けた心の傷もすべて無かったことにできる人である。とくに血を分けた娘であれば…。それが母たる人なのかもしれない。

娘と母、互いの自立への道は、反抗したり反発したり支配をめぐって足掻いているときには、まだほんの第一歩をふみだしたに過ぎない。が、避けて通れないのならば、その踏み出しが大切である。先の見えないいつまで続くかもしれないぬかるみにはまって、お互いは立ち往生するときもあろう。しかしいつかはその先に開けるさわやかな道が見えてくる。それは子どもの成長とともに変わっていく互いの心の力動のおかげである。娘と母関係の質的変化、それは時間も含めて「賜物」以外のなにものでもない。互いに許しあい、歩みよることができたときに、真の自立は達成されたということができるであろう。

第一部のむすび

教育分析の代わりとして自分と生育家族のことを紙上に開示したことが、その機能を果たしたかどうかを問われると…自信は無い。が、ある程度は気持ちにまとまりがついた。このことは、自分の中に住む幼児との決別のための「喪の仕事」としての意義はあると考えている。カウンセラーとして私の中でまだまだ足りないものがあるとすれば、それは「享年七十六歳の死の直前まで厳父を貫いた父との関係」「兄弟姉妹との関係」「友人その他の人々との関係」等々も整理していかねばならないだろう。そうなると、「物語」は果てしなくひろがってしまう。

ここでは「娘・母関係」の物語に焦点を絞ることになっている。少し先を急がなければならない。第一部は、ひとまずこれで幕を閉じる。

（第一部了）

参照および引用文献

1 山田良一著「青春の軌跡―自己確立への道」大日本図書　1981

2 山田英美著「「いないいない・ばあ」と人生」
山梨大学教育人間科学部紀要第5巻2号　218―215頁　2003
「「いないいない・ばあ」と人生」
全日本カウンセリング協議会「カウンセリング」
vol.39―1　30―38頁　2006(前記紀要2003から転載)

3 山田英美著「娘・母関係の物語（一）」
身延山大学仏教学部紀要　第6号17―24頁　2006

【キーワード】
幼稚園期【恥】【緘黙】
小学校期【登校拒否】
思春期【反抗期】
青年期【成熟拒否】
娘・母関係【歩み寄り】

【附「娘・母関係の物語（一）」の目次】

第一部
緒言
第一話　家族内関係線
第二話　姉と母
第三話　私と母と姉
第四話　姉と私と水辺のできごと
第五話　私と母と妹とニッキ（肉柱）の束